

令和元年度 緑の回廊のモニタリング調査結果

資料4

調査年度:2019年度(H31)

緑の回廊名	緑の回廊 越後線	回廊-2		写真1 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 150594(ブナ林) 下越森林計画区 (2017.10.19撮影)		写真2 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 150594(ブナ林) 下越森林計画区 (2017.10.19撮影)		写真3 クマ剥ぎ 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 150594 付近のスギ人工林 下越森林計画区 (2019.12.01撮影)
管轄森林管理局・署名	関東森林管理局 中越森林管理署・下越森林管理署							
所在地	福島県・新潟県境(越後山脈周辺) 【中越森林計画区・下越森林計画区】							
面積	16,133.39ha							
設定・変更年	設定年:2000年(平成12年)							
緑の回廊概況写真			緑の回廊の概要等			過去のモニタリング実施状況		
			緑の回廊の概要(設定目的)	緑の回廊越後線は、主に、福島県と新潟県の県境である越後山脈に沿って設定されている。周辺に設定されている保護林には、越後山脈生物群集保護林、笠堀カモシカ希少個体群保護林、守門岳生物群集保護林が存在する。回廊の総延長は約76kmにわたり、総面積は全て国有林で16,133.39haとなる。		結果概要(調査実施項目・調査手法含む)	【緑の回廊モニタリング調査(2011年)】 平成24年に回廊内8地点、隣接保護林内2地点の計10地点を設定し、調査を行っている。 ○樹木の生育状況 ブナ・ミズナラ群落5地点、ブナ・チシマザサ群落3地点、多雪地広葉樹低木群落2地点で調査されている。 ○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況 本調査において、シカ及びビノシンの生息が明らかになった。	
			モニタリング実施間隔	10年			実施時期・回数	緑の回廊モニタリング調査(2011年(H23))
			法令等に基づく指定概況	水源かん養保安林、土砂流出防備保安林、保健保安林、国定公園特別保護地区、国定公園第1種特別地域、国定公園第2種特別地域、新潟県立自然公園第3種特別地域、鳥獣保護区				

森林生態系多様性基礎調査 格子点ID:150594付近 下越森林計画区 2019/12/01撮影


調査項目	調査手法	結果概要
森林タイプの分布等状況	聞き取り調査/資料調査	・森林面積は回廊の全面積16,133.39haの約72%である11,602.13ha、そのうち天然生林は11,202.09ha(約97%)、育成天然林64.94ha(約1%)、人工林335.10ha(約3%)である。 ・森林の機能類型は、森林空間利用タイプ198.62ha(約2%)、自然維持タイプ8,145.79ha(約70%)、水源涵養タイプ2,656.75ha(約23%)、山地災害防止タイプ600.97ha(約5%)である。(林地面積11,602.13haを100%として集計)
樹木の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	・森林調査簿を基にした林小班単位の主要林分(林相)は、広葉樹林11,148.94ha(約96%)、次いで針広混交林285.29ha(約2%)、針葉樹林が167.9ha(約1%)である。(林地面積を集計) ・林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、ブナが最も多く8,652.95ha(約74%)、次いでヒメコマツ1,750.20ha(約15%)、スギ889.86ha(約8%)と続く。 ・天然生林は、ブナが最も多く8,639.67ha、次いでヒメコマツ1,750.20ha、スギ503.1haと続く。 ・ブナは、林齢121が最も広く分布し7,473.25haである。 ・森林生態系多様性基礎調査では、第四期調査において回廊内の1地点で調査を実施している(格子点ID:150594)。本調査地点はブナ林である。ニホンジカの痕跡は確認されなかった。 ・森林概況調査のライン周辺はブナを主体とした広葉樹林が広く分布し、暖傾斜地にはスギ人工林が分布していた。谷沿いの急斜面地は、崩壊地低木群落となっていた。
林床植性の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	・自然環境保全基礎調査[環境省]によると、今回回廊内にはチシマザサ-ブナ群団の植生が広く分布し、このほか、ミズナラ-ブナ群落や、多雪の山地の急斜面、風衝地に自然低木群落が分布する。チシマザサ-ブナ群団の植生の下層には、ヒメモチ、エゾユズリハ、ユキツバキ、ハイヌガヤ、ハイヌツゲ等の常緑低木が多く生育する。特にユキツバキが群生することが多い。日本海要素の植物として、上述のハイヌガヤ、ユキツバキ、ヒメモチ、エゾユズリハのほか、ヒメアオキ、オオバクロモジ等が生育することも特徴である。ミズナラ-ブナ群落の下層植生には、低木のユキツバキ、ヒメアオキ、ハイヌツゲ、ウワミズザクラ、ヤマウルシ等が生育する。自然低木群落の下層植生には、アカソ、クロバナヒキオコシ、トリアシショウマ、ゼンマイ、スミレサイシン等のススキ草原の構成種や、つる植物が生育し、種数が多い。 ・森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された1地点では、低木層の植被率は20~50%、草本層の植被率は40~50%であった。
病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	・森林生態系多様性基礎調査が実施された調査地1地点では、ニホンジカの痕跡は確認されていない。カモシカによる食痕が確認されている。 ・森林概況調査の結果、ブナ林に隣接するスギ人工林で、クマ剥ぎによる被害が確認された。
野生動物の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	・ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンジカ、カモシカ等の生息が確認されている。 ・中越森林管理署では、「イヌワシ等の保全を考慮した森林施業等の指針」を作成し、緑の回廊周辺ではイヌワシ、クマタカ等の生息状況の確認を行っている。 ・下越森林管理署では、緑の回廊の周辺のスギに対するクマ剥ぎ被害が増加傾向にある。ニホンジカによる被害の報告は無いが、周辺のセンサーカメラによる調査で生息が確認されている。 ・森林概況調査では、ニホンジカの痕跡は確認されなかった。
普及・啓発の実績	聞き取り調査/資料調査	・ホームページによる保護林、緑の回廊の紹介。(中越・下越森林管理署)

調査項目	調査手法	結果概要
巡視の実施状況	聞き取り調査/資料調査	・緑の回廊を目的とした定期的な巡視は実施していない。(中越・下越森林管理署)
森林環境教育の場としての利用状況	聞き取り調査/資料調査	・特になし
学術論文	聞き取り調査/資料調査	・特になし

評価・課題等	・当回廊については、病虫害や深刻な鳥獣害が発生しておらず、健全な状態が維持されている。
--------	---

令和元年度 緑の回廊のモニタリング調査結果

調査年度: 2019年度(H31)

緑の回廊名	富士山緑の回廊	回廊-9		写真1 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 190160 (カラマツ林) 山梨東部森林計画区 (2018.09.18撮影)		写真2 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 220359 (コメツガ林) 富士森林計画区 (2018.07.19撮影)		写真3 富士国有林人穴東地区シカの足跡とシカ道 (2019.11.28撮影)
管轄森林管理局・署名	関東森林管理局 静岡森林管理署							
所在地	静岡県北部・山梨県南部(富士山中腹) 【富士森林計画区・山梨東部森林計画区】							
面積	5,718.76ha(うち国有林2,119.35ha)							
設定・変更年	設定年: 2002年(平成14年)							
緑の回廊概況写真			緑の回廊の概要等			過去のモニタリング実施概況		
			<p>緑の回廊の概要(設定目的)</p> <p>富士山緑の回廊は、富士山の中腹部の標高1,500m~2,500mをほぼ一周する形で設定されている。富士山エリアに設定されている保護林には、富士山生物群集保護林、富士山峠塚亜高山帯植物群落保護林が設定されている。回廊の総延長は約24km、総面積は6,452.87haとなる(うち国有林2,119.35ha)。</p> <p>2019年度は、現地調査として、富士森林計画区人穴東地区から、山梨東部森林計画区(山梨県有林・森林生態系多様性基礎調査格子点ID: 190160)にラインを設定し、樹木・林床植生の生育状況、病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況、野生動物の生育状況を確認する森林概況調査を行った。</p>			<p>結果概要(調査実施項目・調査手法含む)</p> <p>【緑の回廊モニタリング調査(2013-14年)】平成20年に設定した6地点で調査されている。 ○樹木の生育状況 ヒノキ林2地点、イタヤカエデ林、ウラジロモミ林、サワグルミ林、シナノキ林各1地点で調査されている。 ○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況 いずれのプロットでもシカと思われる糞塊や剥皮、食痕などが確認されており、稚幼樹のサイズが小さいのはニホンジカの摂食による影響と考えられる。林床にスズタケが生育している4地点のうち、2地点ではスズタケの被度が大きく減少していた。ほかの1地点では、被度に変化はなかったが、葉が少なくなっており、衰退傾向であった。シカの不嗜好性植物や耐性植物の種類は、いずれのプロットでも前回の平成20年度調査時に比べて増加していた。</p>		
			<p>モニタリング実施間隔</p> <p>10年</p>			<p>実施時期・回数</p> <p>緑の回廊モニタリング調査(2008年(H20)、2013年(H25)、2014年(H26))</p>		
			<p>法令等に基づく指定概況</p> <p>水源かん養保安林、土砂流出防備保安林、保健保安林、国立公園特別保護地区、国立公園第1種特別地域、国立公園第2種特別地域、国立公園第3種特別地域、国立公園普通地域、砂防指定地、鳥獣保護区特別保護地域、鳥獣保護区、文化財保護法に基づく史跡名勝天然記念物</p>					

森林生態系多様性基礎調査 格子点ID:190189(シラビソ林) 山梨東部森林計画区 2018/09/06撮影





調査項目	調査手法	結果概要
森林タイプの分布等状況	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> 森林面積は回廊の全面積5,718.76haの約97%である5,571.40ha、そのうち天然生林は3,945.16ha(約71%)、育成天然林24.41ha(約0.44%)、人工林1,601.83ha(約29%)である。 森林の機能に関する指標は、国有林内においては機能類型で示されており、森林空間利用タイプ840.07ha(約40%)、自然維持タイプ1,269.47ha(約60%)、山地災害防止タイプ9.73ha(約0.46%)である(国有林の林地面積2,119.27haを100%として集計)。 山梨県内の民有林においては、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能2,819.27ha(約82%)、山地災害防止機能/土壌保全機能3,429.24(約99%)、保健・レクリエーション、文化機能1,206.37ha(約35%)、木材等生産機能2,628.39ha(約76%)、指定なし21.58ha(約1%)である(山梨県内の民有林の林地面積3,452.13haを100%として集計。なお、1つの小班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。
樹木の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> 森林調査簿を基にした林小班単位の主要林分(林相)は、針広混交林3,087.10ha(約55%)、次いで針葉樹林2,115.78ha(約38%)、広葉樹林339.27ha(約6%)、未立木地等16.85ha(約0.30%)である。(林地面積を集計) 林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、国有林ではウラジロモミが最も多く1,064.22ha(約50%)、次いでカラマツ801.60ha(約38%)、ヒノキ73.97ha(約3%)、と続く。民有林ではシラビソが最も多く1,710.97ha(約50%)、次いでカラマツ821.48ha(約24%)、コメツガ766.09ha(約22%)と続く。 天然生林のみでは、国有林ではウラジロモミが最も多く716.30ha、次いでカラマツ478.72ha、その他広葉樹48.62haと続く。民有林ではシラビソが最も多く1,044.29ha、次いでコメツガ766.09ha、カラマツ638.34haである。 国有林内の天然林ウラジロモミは、林齢187が最も広く分布し132.93haである。民有林の天然林シラビソは林齢179が最も広く分布し575.83haである。 森林生態系多様性基礎調査では、第四期調査において回廊内の4地点で調査を実施している(格子点ID: 190160、190174、190189、220359)。各地点の植生は、コメツガ林、カラマツ林、シラビソ-カラマツ林、ダケカンバ林である。3地点でニホンジカの痕跡が確認された。残りの1地点ではカモシカの糞が確認された。 森林概況調査のライン周辺は、富士森林計画区ではウラジロモミ人工林、山梨東部森林計画区ではカラマツ人工林が分布していた。
林床植性の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> 自然環境保全基礎調査[環境省]によると、今回廊には、シラビソ-オオシラビソ群集やカラマツ群落が広く分布し、やや低標高域にはカニコウモリ-ウラジロモミ群集、シラビソ植林がまとまって分布する。シラビソ-オオシラビソ群集の下層植生には、低木層にコウラクツツジ、オオバスのノキ、ハリブキ、草本層にコフタバラン、コイチヨウラン、カニコウモリ、シラネワラビ、セリバオウレン、ゴゼンタチバナ、タケシマラン、ハリガネカズラ等が生育する。カラマツ群落の下層植生には、シラビソ、カラマツ、タカネイバラ、ツバメオモト、ハコネコメツツジ、ミヤマアキノキリンソウ等が生育する。カニコウモリ-ウラジロモミ群集の下層植生には、カニコウモリ、シラネワラビ、ツバメオモト、イトスゲ、ミヤマイボタ等が生育する。 森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された地点における下層植生の植生率は、カラマツ林では低木層80~90%、草本層40~60%、ダケカンバ林では低木層70~90%、草本層80~90%、シラビソ-カラマツ林では低木層30%、草本層10%、コメツガ林では低木層10~40%、草本層50~60%であった。

調査項目	調査手法	結果概要
病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンジカの生息密度が高く、極めて深刻な食害による更新阻害、及び樹木の枯損が生じている。 ・森林生態系多様性基礎調査の調査地2点(2015年調査)では、ニホンジカによる採食圧により、下層植生、低木層の消失が確認されている。 ・森林概況調査では、ニホンジカの糞、足跡、シカ道、食痕、剥皮等が複数確認された。また、2019年台風19号による風倒木が確認された。 ・静岡森林管理署では、緑の回廊を含む富士宮市を中心とした国有林で、ニホンジカ捕獲請負事業(忍び猟)を実施しており、富士山西側の人穴東地区では生息密度が5分の1程度まで低下している。 ・山梨県では、緑の回廊を含む富士山周辺の県有林の広域で、剥皮や下層植生の消失が確認されている(平成22年「ニホンジカ影響把握事業」)。
野生動物の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンジカ、ツキノワグマ、ヤマネ、ニホンリス、オコジョ等の生息が確認されている。
普及・啓発の実績	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> ・森林、林業に対する理解を深めてもらうための施設として、森林総合研究所に「森の学校」を併設している。また、学校の総合学習、市民講座等の生涯学習、各種団体での勉強会向けに、出前講座を実施している。(山梨県) ・森林管理署主催による国有林見学会を、2017年まで実施していた。(静岡森林管理署)
巡視の実施状況	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> ・事業実施区域周辺を中心とした定期的な巡視に加え、富士山自然休養林保護管理運営協議会による登山道を中心とした巡視を合同で年1回実施している。(静岡森林管理署)
森林環境教育の場としての利用状況	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> ・植生保護のためのシカ柵設置を、地元の大学やNPOと協働で進めている。(静岡森林管理署)
学術論文	聞き取り調査/資料調査	<p>西教生(2018) 富士山北麓山地帯の鳥類群集、山階鳥学誌50: 29-34 中村俊彦(2017) 日本中部亜高山帯林の遷移とコケ群落の動態、蘚苔類研究 11(9): 247-259 岡秀一, 白川亜沙子, 菅野洋光(2015) 富士山北西斜面御庭付近のカラマツ低木林はなぜ維持されるのだろうか?—御中道巡りの魅力の再認識のために—、地学雑誌 124(6):1047-1060</p>
評価・課題等		<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンジカによる食害が顕著なエリアであり、ニホンジカによる採食圧により下層植生消失や樹木の枯損が確認されている。一方で、捕獲事業によりニホンジカの生息密度低下、植生の回復等が認められている地域もあることから、今後も緑の回廊への影響の変化に注視する必要がある。

令和元年度 緑の回廊のモニタリング調査結果

資料4

調査年度:2019年度(H31)

緑の回廊名	丹沢緑の回廊	回廊-8		写真1 西丹沢切通峠(神奈川県・山梨県境)付近(イヌブナ林・ヒノキ人工林) 神奈川森林計画区 (2019.11.27撮影)		写真2 森林生態系多様性基礎調査 格子点ID: 190244 (モミーヌシデ林) 山梨東部森林計画区 (2018.11.14撮影)		写真3 西丹沢切通峠(神奈川県・山梨県境)付近 シカの足跡とシカ道 (2019.11.27撮影)
管轄森林管理局・署名	関東森林管理局 東京神奈川森林管理署・静岡森林管理署							
所在地	神奈川県・静岡県・山梨県境(丹沢山塊) 【富士森林計画区・山梨東部森林計画区・神奈川森林計画区】							
面積	8,394.40ha(うち国有林3,593.76ha)							
設定・変更年	設定年:2002年(平成14年)							
緑の回廊概況写真			緑の回廊の概要等			過去のモニタリング実施概況		
			<p>緑の回廊の概要(設定目的)</p> <p>丹沢緑の回廊は、標高1,500m級の山並みが連なる丹沢山地から山梨県・静岡県と接する三国山、角取山までの区域に設定されている。丹沢エリアに設定されている保護林には、丹沢山地生物群集保護林、西丹沢ブナ希少個体群保護林、西丹沢モミ希少個体群保護林が設定されている。回廊の総延長は約43km、総面積は8,394.40haとなる(うち国有林3,593.76ha)。</p> <p>2019年度は、現地調査として神奈川森林計画区の西丹沢切通峠付近にラインを設定し、樹木・林床植生の生育状況、病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況、野生動物の生育状況を確認する森林概況調査を行った。</p>			<p>結果概要(調査実施項目・調査手法含む)</p> <p>【緑の回廊調査(2013-2014年)】平成20年に設定した6地点で調査されている。 ○樹木の生育状況 ブナ林3地点のほか、ブナ-イヌブナ林、シオジ林、ミズナラ林各1地点で調査されている。 ○病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況 いずれの地点も林床にはスズタケが優占しており、1地点で被度の減少が見られるものの、シカ等による衰退の様子は確認されなかった。また、不嗜好性植物・耐性植物も、多い地点で3種増加していたものの、被度は低く大きな変化は見られなかった。</p>		
モニタリング実施間隔			10年			実施時期・回数		
法令等に基づく指定概況			水源かん養保安林、土砂流出防備保安林、保健保安林、国定公園特別保護地区、国定公園第1種特別地域、国定公園第2種特別地域、神奈川県立自然公園第2種特別地域、神奈川県立自然公園第3種特別地域、静岡県自然環境保全地域特別地区、砂防指定地、鳥獣保護区特別保護地域、鳥獣保護区			緑の回廊モニタリング調査(2008年(H20)、2013年(H25)、2014年(H26))		

森林生態系多様性基礎調査 格子点ID:220427(オオイタヤマメイツ林) 富士森林計画区 2015/10/26撮影

調査項目	調査手法	結果概要
森林タイプの分布等状況	聞き取り調査/資料調査	<p>・森林面積は回廊の全面積8,394.40haの約97%である8,122.27ha、そのうち天然生林は5,023.01ha(約62%)、育成天然林756.89ha(約9%)、人工林2,342.36ha(約29%)である。</p> <p>・森林の機能に関する指標は、国有林内においては機能類型で示されており、森林空間利用タイプ1,046.12ha(約29%)、自然維持タイプ812.42ha(約23%)、水源涵養タイプ1,345.92ha(約38%)、山地災害防止タイプ372.89ha(約10%)である(国有林の林地面積3,577.35haを100%として集計)。静岡県内の民有林においては、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能286.50ha(100%)、保健・レクリエーション、文化機能108.83ha(約38%)、木材等生産機能58.11ha(約20%)である(静岡県内の民有林の林地面積286.5haを100%として集計)。なお、1つの小班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。山梨県内の民有林においても静岡県と同様、市町村森林整備計画に基づくゾーニングとして設定されており、水源涵養機能1,920.57ha(100%)、保健・レクリエーション、文化機能48.37ha(約3%)、山地災害防止機能/土壌保全機能996.91ha(約52%)である(山梨県内の民有林の林地面積1,920.57haを100%として集計)。なお、1つの小班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。神奈川県内の民有林では、林小班ごとに、市町村森林整備計画に基づく各ゾーニングが3段階の重要度で設定されていた。このため、各ゾーニングの重要度が中～高とされている林小班を集計した。その結果、水源涵養機能、山地災害防止機能/土壌保全機能、保健・レクリエーション、文化機能は民有林全面積である2,337.85haで重要度が高く設定され、木材等生産機能は1,013.10ha(約43%)で重要度が高く設定されていた(神奈川県内の民有林の林地面積2,337.85haを100%として集計)。なお、1つの小班に対して複数設定されていることがあるため面積、割合は重複する)。</p>
樹木の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<p>・森林調査簿を基にした林小班単位の主要林分(林相)は、広葉樹林5,349.37ha(約66%)、次いで針葉樹林2,304.78ha(約28%)、針広混交林が458.71ha(約6%)、未立木地等9.41ha(約0.12%)である。(林地面積を集計)</p> <p>・林小班単位の林地面積から、主要な構成樹種をみると、国有林ではヒノキが最も多く1,481.80ha(約41%)、次いでモミ753.99ha(約21%)、スギ547.39ha(約15%)と続く。民有林では、広葉樹(民有林においては細分されていない)が最も多く3,435.97ha(約76%)、次いでヒノキ857.38ha(約19%)、スギ164.33ha(約4%)と続く。</p> <p>・天然生林のみでは、国有林ではモミが最も多く710.98ha、次いでヒノキ460.51ha、ブナ456.76haと続く。民有林では広葉樹が最も多く2,808.93ha、それ以外は、ヒノキ2.91ha、スギ、ヒノキ、マツ以外のその他針葉樹30.69haである。</p> <p>・国有林内の天然林モミは、林齢115が最も広く分布し431.66haである。民有林内の広葉樹天然林は林齢178が最も広く分布し251.79haである。</p> <p>・森林生態系多様性基礎調査では、第四期調査において回廊内の2地点で調査を実施している(格子点ID:190244、220427)。各地点の植生は、モミーヌシデ林、オオイタヤマメイツ林である。2地点とも、プロット内でのニホンジカの痕跡が確認された。</p> <p>・モニタリングサイト1000では、2018年に回廊内の1地点で調査を実施している(西丹沢TZ-DB1)。本調査地点はブナ林である。</p> <p>・森林概況調査のライン周辺では、北側にイヌブナを中心とした広葉樹林、南側にヒノキ人工林が中心に分布していた。</p>
林床植性の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<p>・自然環境保全基礎調査[環境省]によると、当回廊の西部には、スギ・ヒノキ・サワラ植林、ブナ-ヤマボウシ群集が広く分布する。スギ・ヒノキ・サワラ植林、特に適潤地のスギ植林の下層植生には、コアカソ、タマアジサイ、ニフトコ、ヤマアジサイ、ハナイカダといった好湿地性の低木や、ミヤマフユイチゴ、クサイチゴ、アケビ等が生育することが多い。ブナ-ヤマボウシ群集は太平洋側のブナ林で、林床にはスズタケが優占する。ブナ帯上部の林分では、マイヅルソウ、ヒロハツリバナ等の亜高山性針葉樹林との共通種もみられる。東部には、ブナ-ヤマボウシ群落のほか、アカシデ-イヌシデ群落や、大山の高標高地には岩角地・風衝地低木群落もみられる。アカシデ-イヌシデ群落の下層植生には、アブラチャン、クロモジ、ムラサキシキブ等が生育する。</p> <p>・森林生態系多様性基礎調査による植生調査が実施された2地点では低木層は欠くことが多く、植被率は高い地点で40%であった。草本層の植被率は10%程度と低い。</p>

調査項目	調査手法	結果概要
病虫害・鳥獣害・気象害の発生状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・回廊内にあるモニタリングサイト1000調査地点1地点では、タンナサワフタギにニホンシカのものと思われる樹皮剥ぎが確認されている。 ・森林概況調査では、ニホンジカの糞、足跡、シカ道、食痕、剥皮等が複数確認された。また、ツキノワグマによるものと推測される樹皮剥ぎが確認された。 ・東京神奈川森林管理署では、ニホンジカの生息密度が高く、全域で食害による更新阻害や樹木の枯損等が生じている。また、ツキノワグマによる樹皮剥ぎ被害が増加傾向にある。
野生動物の生育状況	聞き取り調査/資料調査/概況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンザル、ニホンリス、ツキノワグマ、ニホンジカ、カモシカ、イノシシ等が生息する。
普及・啓発の実績	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> ・神奈川県では、秦野、西丹沢の2箇所ビジターセンターを設置し、地形、地質、動物、植物、歴史、公園利用などについて、展示・解説を行っている。また、公募制の自然教室、団体プログラムなどのプログラム企画、県内イベントへのPRブース出展等を行っている。
巡視の実施状況	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な巡視は実施していないが、台風等の災害後には森林官による巡視を実施している。(東京神奈川森林管理署) ・ビジターセンターによる定期的な巡視を実施しており、ブログ等により情報発信を行っている。また、各山小屋からの情報についても集約し、情報発信を行っている。(神奈川県自然環境保全センター)
森林環境教育の場としての利用状況	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> 秦野、西丹沢の両ビジターセンターを中心に、林間学校等で環境学習の場として利用されている。(神奈川県自然環境保全センター) 高校、大学の山岳部合宿の場として利用されている。
学術論文	聞き取り調査/資料調査	<ul style="list-style-type: none"> 高槻成紀, 梶谷敏夫(2019) 丹沢山地のシカの食性—長期的に強い採食圧を受けた生息地の事例—. 保全生態学研究, Advance published 永田幸志(2019) 神奈川県におけるシカによる森林被害. 日緑工誌, 44(3):475-478 佐藤司郎, 鈴木牧, 谷脇徹, 田村淳(2019) 丹沢山地におけるシカの増加がオサムシ科甲虫に及ぼす間接的影響. 日林誌100: 141-148
評価・課題等		<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンジカによる食害が顕著なエリアであり、ニホンジカによる採食圧による下層植生消失や樹木の枯損が確認されている。また、ツキノワグマによる樹皮剥ぎも増加傾向にあり、今後短期間での被害拡大等変化が生じる可能性があることから、緑の回廊への影響に注視する必要がある。